

---

# 魔天創記 （壱）

ちゃすけ丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔天創記（壱）

### 【Nコード】

N6116Y

### 【作者名】

ちゃすけ丸

### 【あらすじ】

シンプルで王道、読み易い。

そんな作品を目指して執筆していきます。

天使や悪魔を題材に「剣士が悪魔を退治する話」となっています。

素人が書いたファンタジー物語なので、暖かく寛大な御心で、お手透きな際に読んで下されば幸いです。

）mixiアプリより移転

## 登場人物

### 【レイヴァン】（24歳・男）

最愛の人を殺した悪魔を追って旅をする剣士。  
人並み外れた剣術と光属性の精霊術を操る。  
正義感は強いが、素直に表現することは稀。

> i 3 5 3 9 9 — 4 4 5 4 <

### 【リル】（16歳・女）

レイヴァンのことをご主人様と呼び慕う女の子。  
黒猫に変身する能力を持つ。  
子供扱いされるのが嫌い。

> i 3 5 4 0 1 — 4 4 5 4 <

### 【ブライト】（24歳・男）

レイヴァンとは幼なじみで一緒に旅をしている力自慢の男。  
よく食べ、よく遊び、よく寝るのが信条。  
女好きがたまにキズ。

> i 3 5 4 0 0 — 4 4 5 4 <

＼　　1　　＼

男が二人と女が一人。

わずか三人の一行だった。

大陸では人々を襲う悪魔と呼ばれる化け物たちが活発に活動しており、少人数での行動は自ら命を絶つことに等しいと老若男女誰もが理解している。

ことさら人通りの少ない山道は危険なのだが、彼らは臆することなく歩き続けていた。

一時間。

二時間。

黙々と地面を踏みしめる三人だったが、突然女が口を開いた。

女は非常に幼く見え、どちらかと言えばまだ少女のように見える。

両肩を露わにした黒いシャツに赤いミニスカートのワンピースを重ね着した彼女は実に愛くるしく、大きな瞳と肩にかかる金茶色の髪、そしてその髪に結ってある大きな黒リボンが印象的だった。

「ご主人様、リルは疲れたです。次の町にはまだ着かないですか？ もう三日も野宿しながら歩いているです。早くふかふかベツドの上でゆっくりと眠りたいです」

偏った語尾で自分のことをリルと言う彼女は歩き疲れた様子を見せながら、少し前を歩く主人の腕を掴まえて話しかける。

すると「この山を越えれば町があるはずだから、日が暮れる頃には着くだろう」と素っ気ない態度で答えが返ってきた。

「えっ！？ だって、さっきお昼ご飯食べたばかりですよ。お日様もお空の真上にあるし！」

……と、いうことは？

次の町に着くのは、まだまだなんですわね……」

彼女は返事の意味を理解すると大きな息を吐き、彼の腕を掴んだ

まま頂垂れトボトボと歩き続けた。

ゝ 2 ゝ

彼女の愚痴を聞いたからか、しばらくすると今度はもう一人の男がぼやき始めた。

彼は茶色い短髪で、背丈は主人と呼ばれる男よりも高く身体も一回り大きかった。

ゆったりとしたシャツとズボンを着込んだ彼は、たくましいその腕で大きな荷物袋を担いでいる。

「リルの言うとおり、俺も早く町に着きたいぜ。 久々に腹いっぱい飯を食って、酒を飲んで、そして可愛い女の子たちと楽しい夜を過ごしたいからな！」

……レイヴァンだってそう思うだろ？」

「そうだな」

リルに主人と呼ばれ、体格良い男にも素っ気無い言葉を返した男の名はレイヴァンと言っらしい。



ロングコートをはじめ服装の全ては黒系統でまとめられており、金色の髪と瞳が一層際立って見える。

目鼻は整っていて結構な美男子だ。

三人の中で彼だけが腰に剣を携えていた。

「お前って奴は相変わらず返事が冷たいな。　　気持ちがこもってない、気持ちが！」

「相変わらずなのはお前も一緒だ、ブライト。　　たまに言葉を発したかと思えば、飯か酒か女。　　それしか言えないのか？　　よもや旅の目的を忘れた訳ではないだろうな？」

「誰が忘れるか。　　だがな、俺はその三つの楽しみがあってこそ頑張れんだよ！」

二人は一瞬で剣呑な雰囲気醸し出したが、幼なじみとして長年行動を共にしているのでお互いの考えは良く解っていた。

「レイヴァン、お前は真面目すぎる」

「お前は不真面目すぎる」

絶妙の間合いでレイヴァンが言葉を返すと、鋭く睨み合った視線は直ぐに柔らかくなる。

ブライトと呼ばれる茶髪男の笑い声が大きくなると、レイヴァンは笑いを堪えるように小さく肩を揺らした。

ゝ 3 ゝ

再び口を閉ざし歩き始めた三人だったが、先頭を行くレイヴァンは急に立ち止まり、次の瞬間には表情を引き締めていた。

少し先に見える森の茂みが、風の流れとは別にざわめくのが確認できたからだ。

そこに何かが潜んでいるのは間違いない。

「四匹いるな」

長年の経験と鋭い感性を持つ彼は、真っ先に悪魔の存在を感じ取っていた。

すぐに側にいた二人に声をかける。

「ブライトは右の茂みに潜む二匹を」

「任せてくれ」

「リルはしばらく下がっている」

「はいです！」

突然のことだというのに二人は慌てる様子を一切見せなかった。

レイヴァンの短い指示を慣れた様子で受け止めるとすぐに行動に移す。

ブライトは担いでいた荷物袋をリルに渡すと腰を落として構え、リルは袋を両手で抱きかかえて数歩後ろに下がった。

二人の様子を見届けたレイヴァンは腰に差していた剣を左手でゆつくりと抜いて構えた。

木々の揺れる音が次第に大きくなった。

「来るぞ！」

レイヴァンが叫ぶのと同時に、茂みから何かが数体飛び出して来る。

人間よりも一回りも二回りも大きく、茶褐色で泥にまみれた身体。

ひどく崩れた醜い顔、手には木を引き抜いて作った棍棒。

オークだった。

オークの知能は低く見境なく暴れては獲物を捕食する下級悪魔なのだが、単純な故にそれが最大の脅威でもある。

今も視界に入った三人を食料と判断し、食事にありつけると突進してきたのだ。

レイヴァンとブライトはそれぞれ二対ずつ襲来した悪魔を迎え撃った。

一匹目のオークがレイヴァン目掛けて飛びかかり大きな棍棒を振り下ろす。

巨体とは思えぬ予想外の素早い動きに一瞬目を見開いた彼だったが、紙一重でかわすと、すかさず反撃に移った。

土埃に紛れて側面に回り込むと、剣を真横に薙ぎ払う。

そして続け様に左右から斬り上げる。

あまりにも一瞬すぎてオークには何が起きたか解らなかった。

気がついた時には自分の右腕は切り落とされ、黒い血が地面に小さな池を作ろうとしていた。

痛みと怒りで吠えたオークは再度襲いかかろうとしたが、それよりも早くレイヴァンは追撃に動いた。

両足を斬りつけて行動の自由を奪い、腹に斬撃を食らわせる。

オークはうつ伏せに崩れ落ちて、小さく痙攣したままその場から動かなくなった。

二匹目のオークは、レイヴァンの隙を狙い背後に回り込んで棍棒を振り上げた。

知能が低いわりには考えた行動だったが、ちょうど一匹目のオークを倒し終えた彼は背後の気配に気がついていていた。

すばやく剣を逆手に持ち変えると、振り向き様に剣をオークの腹に突き刺した。

相手がよろめいた隙に刺した剣は抜き、今度は力いっぱい腹を薙ぎ払う。

不気味な叫び声と共に二匹目のオークも崩れ落ちた。

レイヴァンが流れるような動きで二匹のオークを倒したのと同じタイミングでブライトも二匹目のオークの首をへし折っていた。

彼もまた余裕の笑みを浮かべている。

「ちよろいもんよ!」

「お前の戦い方は、相変わらず原始的だな」

「何を言う、男は何と言っても力だろ！ 拳だろ！」

ブライトは笑いながら両手についた砂を払い落とした。

レイヴァンは四体のオークが全て瀕死で動けないのを見届けると剣を鞘に収めた。

そして後方で戦況を見守っていたリルに一言声をかける。

「後は任せた」

「はいです、ご主人様！」

大きく頷いた彼女は小袋から小石をひとつ取り出すと瀕死のオークに駆け寄り、その石を相手に向けた。

この小石は精霊石と呼ばれており、悪魔が弱ると何かに取り憑い



て生き長らえようとする習性を逆手に取った悪魔を封じるための道具である。

リルが短い呪文を唱えると、小石はオークを光に変えて吸収し見事な輝きを放つ宝石へと変化した。

彼女は宝石へと変化した精霊石を別の小袋へと移し入れ、袋の重みを感じて笑みを浮かべる。

「結構たまつたです！」

「今回は移動距離が長く結構な数の悪魔を封じ込めて移動しているからな！　まとめて換金したら、相当な金額になりそうだ！　相当な金額ということは？　相当楽しめるわけで？」

……否応にも、やる気と元気が湧いてくるぜ！」

「うんうん、ブライトの言うとおり元気が出てきました！　ご主人様、こんな所に立ち尽くしていないで、早く次の町を目指しましょうです！」

オークと闘う前までは、まだ着かないのかと愚痴をこぼしていた二人だったが、これからの楽しみに想像を膨らませると急に活力を

取り戻したようだ。

リルは主人の手を引き、山道を走り出した。

く 5 く

リルとブライトが活力を取り戻したことによってレイヴァンたち一行は夕暮れ前に山麓の町に辿り着くことができた。

町に着くと元気な二人は換金を行うため競い合うようにギルドを目指す。

ギルドは精霊石を生み出した術士たちが設立した団体で、悪魔の情報提供はもちろん悪魔がらみの依頼の斡旋、宝石に変化した精霊石の買い取り、特殊な効果を持った精霊石や戦闘道具の加工販売を行っている。

その利便性からギルドは発足後瞬く間に大陸全土へと広まり、今ではギルドのない町はないと言われている。

この田舎町だって例外ではない。

レイヴァンたちは換金を済ませると、次は食事と寝床を求め酒場へと足を向けた。

「いや、予想以上に質の良い石があったお陰で、かなりの金貨が

手に入っ たな！ これで今夜は楽しめそうだぜ！」

「だめです！ ブライトはお金使うの荒いんだから！ リルがしっかりと管理するから、袋をこっちへ渡すです！」

道中ブライトが満面の笑みで金貨の入った袋を掌で弄びながら歩いていると、その横で見えていたリルが慌てて袋を取り上げようと彼に飛びかかった。

「な、なんだよ急に！ 飛びかかってくんなって！」

「いいから早く渡すです！ 早く！」

「……解ったから、爪を立てるな！」

背の高い彼は素早く袋を持ち上げて頑なに拒み続けたが、しつこく飛び掛ってくるリルに堪らず袋を手放した。

「ったく……」

「解れば良いんです」

勝ち誇った顔をしながら奪い取った袋を覗き込んだリルだったが、途端に頬を膨らませる。

「ブライトずるいです！ 卑怯です！ 今回、金貨五十枚あったのに、中には十枚しか入っていないです！ こっそり自分のポッケに移したですね！？」

「何のことだか」

「あ！ 今、全力でほくそ笑んだです！ 許さないです！」

「リル、それだけあれば十分に足りるんだから、そう騒ぐな」

彼女は再びブライトに飛びかかろうとするが、レイヴアンに窘められた。

主人に逆らう訳にはいかず思いとどまった彼女だが、どうしてもやりきれず「ご主人様はブライトに優し過ぎるです！」と叫び散らした。

金貨の取り分を話しながら歩いている間に日は暮れ、酒場に着いた頃にはすっかり夜になっていた。

早速中へと入ると視界に多くの人たちが酒を片手に騒いでいる姿が飛び込んでくる。

酒場もまたギルド同様にどんな町にもある大衆的な施設だ。

しかし、この町の酒場は何かが違っていた。

その違いに、いち早く気が付いたのはブライトだった。

「居ない！」

「居ない？」

レイヴァンとリルは急に声を上げた彼の横顔を不思議そうに見つめる。

「二人ともよく見るよ！ 若い女の子が居ないだろ？ あれに見えるも、これに見えるも、どう考えても俺たちより年上だぞ！」

ブライトに言われて、周りを見渡す二人。

じっくり見て、その様子に気がつく。

確かに、彼が言うように同世代ぐらいの女性が居なかった。

酒や食事を運んでいる給仕の女や、男達と一緒に居る女たちも年上に見える。

「どうやら、そのようだな」

「先日、大人の色気がどうのって言っていたじゃないですか。夢が叶って良かったですね、ブライト」

「今は年下の若い子を相手にしたい気分なんだ！」

「……そんなこと知らんです。何より、リルにはどうでもいいことです。ご主人様、早く食事にしようです」

「そうだな」

「折角ここまでガンバってきたのに！　楽しみにして山を下りてきたのに！　何という酷い仕打ち。　こうなったら自棄酒だ！」

肩をがっくりと落として頂垂れていたブライトは開き直ると空いていたテーブル席に着き、近くの店員を呼びつけると大量の食事を頼み始めた。

レイヴァンたちは彼がこうなると腹が満たされるまで止まらないことが解っていたので、彼と同じ席には着かず静かなカウンター席へと腰を下ろした。



ゝ  
7  
ゝ

席に着いた二人の前に白髪で身体の高い男が現れた。

「いらつしゃい、何にする?」

そう尋ねられ、相手がこの酒場のマスターだと理解したレイヴァンは美味しい物なら何でも良いと答え、リルは魚料理を注文した。

「……飲まないのかい?」

酒場に来て酒を頼まない客は珍しい。

自然な流れで質問をぶつけられると「呑むです!」とリルが間髪入れずに答えた。

「おいおい、お嬢ちゃんにはまだ早いんじゃないかい?」

「何言ってるですか! リルはもう立派な大人です!」

リルは誰が見ても少女のように幼く見える。

飲まないのかと尋ねたマスターも質問の矛先はレイヴァンだった。

しかし、彼女は先日十六歳の誕生日を迎え、世間一般的には間違いなく成人の女性となる。

何より彼女にとっては子供に見られることが不満なため、小さな手で机を強く叩くと立ち上がって笑うマスターを睨み付けた。

「実に威勢の良いお嬢ちゃんだ！ 気に入ったよ。そういうことなら魚に良く合う上物の葡萄酒があるから出してやろう」

「そうこなくっちゃです！」

目を丸くして驚いたマスターだったが彼女の勢いに感心すると声に出して笑った。

リルもまた彼の一言で険しい顔が一瞬で綻ぶ。

「金髪の旦那はどうする？ あんたも何か呑むかい？」

「必要ない」

レイヴァンが即答すると、そのあまりにも無愛想だった言葉にリルが慌てて言葉を付け足した。

「ご主人様は、お酒を呑むと暴れるから呑まないようにしてるんです！」

「そ、そうか、なら無理には勧めないよ。その腰にぶら下げた剣で店内を壊されても困るしね」

一瞬表情を凍らせたマスターは笑いながら裏へと入って行って、料理の準備に取り掛かった。

酒場のマスターといえば、カウンター席の前で酒を注いで客の相手をしたり、手持ち無沙汰に洗い終えたグラスを拭いているものなのだが、このマスターは自ら料理をするらしい。

若い給仕の女性も居ないし、人手不足なのであろうか。

コックに混じり奥で調理をするマスターを興味津々に見つめているリルの横で、レイヴァンは豪快に飲み食いしているブライトの様

子を見つめながら静かに何かを考えていた。

「いただきますです！」

物思いに耽っている隣で元気な声が響く。

気が付けばマスターの作った料理は既に目の前に運ばれており、横を見れば挨拶を済ませたりルが目を輝かし料理を見つめている。

彼女は我慢できないと言わんばかりに手にしたフォークを魚に突き刺すと、もう片方の手で葡萄酒のグラス持ち、物凄い勢いでその両方を口に運び舌鼓を打ち始めた。

「どうして若い女が居ないんだ？」

出された食事には手を着けずマスターに話しかけると、別の客へ酒を注いでいた彼は片方の眉をぴくりと動かして視線を静かに返してきた。

「まさか旦那もハンターかい？」

ハンター。

それは悪魔を精霊石に封じ込め、ギルドで換金することを生業としている者たちの一般的な呼称だった。

店内にいる鎧を纏った体格の良い男たちはハンターで間違いない。

「やっていることは同じだな」

「そうか。　なら、話は早い。　最近この町では若い女が行方不明になる事件が相次いでいるんだ。　で、その事件には何かしらの悪魔が絡んでいるっていう噂さ」

「それで若い働き手が居ないのか」

「そう言うことだ。　だが、全員が居なくなっただって訳じゃない。　被害が広がらないよう用心の為に勤務を見合わせているんだ」

「賢明だな」

「……正直なところ、怯えて家から出てきてくれなくてね。　若い給仕目当てに来てくれる客もいるってのに、こんな状態が続いたんじゃないじゃ商売上がったんだよ」

「十分盛況に見えるが？」

「今この店に居る厳つい顔をした他の連中は皆、噂の悪魔を封じ込めようと躍起になっているのさ。これだけの事件だ、精霊石に封じ込めてギルドにもっていけば、莫大な金が入るからな」

「たしかに、良い金になりそうだな」

「だが、事件解決前のハンターってのは金がなくて逆に羽振りが悪いの何の……」

「違う」

彼の言葉にレイヴァンは思わず苦笑した。

「その悪魔の特徴について何か知らないか？」

気を取り直したレイヴァンがマスターに質問をぶつけると、彼も表情を引き締めた。

「生憎、悪魔を封じ込めようとしたハンターがことごとく消息を絶っているようで、詳しい情報が無いんだ」

「そうか……」

その一言が心底残念そうな素振り見えたのか、今度はマスターがレイヴァンに質問を返す。

「旦那も、この事件の悪魔を捕まえようと思ったかい？」

「……俺は、ある悪魔を追っている。黒い羽根の翼と真紅の眼を持つ悪魔だ」

しばしの沈黙の後、おもむろに言葉を発したレイヴァンの表情にマスターは思わずたじろいだ。



一瞬、人間以外の何かと会話をしているような錯覚さえ感じた。

背筋の凍る思いをしながら、何とか声を振り絞る。

「そ、その悪魔の名は？」

「奴の名はメフィストフェレス」

悪魔の名を聞いてマスターは、大きく唾を飲み込んだ。

メフィストフェレスと言えばギルドが最も危険な存在として最上級指定をしている悪魔だ。

神出鬼没で突然各国に現れ、殺戮と破壊を繰り返すことはハンターはもちろん小さな子供だって知っている。

それだけなら他の悪魔もいるのだが、何より王族殺しで有名だった。

悪魔の名を口にすれば本当に悪魔がやってきて襲われる。

我が王は殺され、この国は終わりだ。

そんな噂は瞬く間に広まり、騒ぎを終息させるために『メフィストフェレスに関する一切話してはならない』と法で噂を禁止した国もある。

「旦那、私も商売上悪魔の話はよくしますけど、その名前だけは禁句でしょう」

「俺には関係ない。むしろ会いたいと思っているくらいだ」

彼の返事にマスターはそれこそ言葉を失った。

それはつまり死にたいと言っているようなものだ。

酒に酔った勢いで最上級悪魔を封じてみせると意気込むハンターは何人も見てきたが、望んで会いたいという人間は今まで出逢ったことがなかった。

彼が何故その悪魔を追っているのか興味が沸いたが、メフィストフェレスの話は避けたかったので、この町で起きている事件に話題

を戻した。

「先日客が言っていたことなんだが、夜中に夜空を飛ぶ馬鹿でかい生き物を見たらしい。もしかしたら、そいつが悪魔かもしれないな」

「そうか……」

レイヴァンは表情を緩めると、ようやく食事を開始した。

しばらくしてレイヴァンは席を立った。

「上の部屋で休ませてもらおうか。金は食事代と合わせてここに置いておく」

ポケットから硬貨を取り出して机に置くと、マスターはそれを見て目を見開いた。

そこには金貨が置かれているのだ。

金貨が一枚あれば、一日遊び続けたって有り余る額だ。

それが数枚置かれている。

一日の総売り上げ額に匹敵する食事代にマスターは思わず息を呑んだ。

「リル、行くぞ」

「はいです!」

歩き出す主人を追ってリルも席を立った。

「おじさま!　とっても美味しい料理とお酒でした、リル大満足です!」

「ど、どういたしまして……」

「ご主人様!」

「どうした」

「リル、今日もご主人様と一緒にベッドで寝たいです!」

彼女は満面の笑み、というよりもむしろ、にやけ顔でレイヴァンを見つめている。

酒を飲んだため、酔ってしまったようだ。

「断る」

レイヴァンは短く言い放つと彼女を待たず歩き始め、店の隅にある階段へと足をかける。

その様子を見て、マスターが慌てて声を上げた。

「ちょっと、旦那！　こんなに貰っていいのかい？」

彼は言葉を返さなかったが視線を店の中央へと向けた。

マスターが釣られて視線を向けると、そこには卓上に堆く積み重ねられた食器があり、大柄の男が物凄い勢いで食事を続けている。

呆然と見つめるマスターに向かって、レイヴァンは「そういうことだ」と呟いた。

レイヴァンはベッドに横たわりながら天井を見上げ物思いに耽っていたが、そこに風呂上がりのリルがやってきたことで状況が一変した。

「ご主人様、何を考えているのですか？」

彼女は主人に許可を取ることなく開口と同時に彼目掛けて飛びかかる。

大きな音を立てベッドが軋むもののレイヴァンは表情を変えることなく彼女を受け止めると、何事もなかったかのように無言のまま自分の横へと退かした。

「どうしたんですか、ご主人様？」

嬉しそうに主人の顔を覗き込み尋ねた彼女だったが、視界に入った彼の厳しい表情を見て急に伏し目がちになった。

「……ご主人様は、いつもベッドの上で何かを考えて難しい顔をしているです。たまにはブライトみたいに可愛い子とお酒を飲んで、楽しい夜を過ごせばいいのに。そしたら……」

「俺の趣味じゃない」

レイヴァンが言葉を遮ると彼女は一層表情を曇らせたが、何を思いついたのか急に笑顔になった。

「なら、やっぱり、リルがご主人様を満足させるしかないです！  
リルは先日大人の女になったです！」

言い終わるや彼女の表情は笑顔から不敵な笑みに変わっている。

突拍子もない発言にレイヴァンも思わず表情を変え口数も多くなつた。

「俺が一度でもお前の相手をしたことがあったか？ どこから、そんな考えが生まれるんだ！ まだ酔っているのだろう？」

「え？ そんなことないですよ、ご主人様！ご主人様に助けられたあの時から、リルの全てはご主人様のモノです！」

彼女が再びレイヴァンに抱きついて頬ずりすると、葡萄酒の臭いが彼の鼻を刺激した。



「お風呂でちゃんと身体を洗ってきたです」

「いいから、もう寝ろ」

「ええ〜！ 嫌です〜！ ご主人様はリルに興味がないんですか！？」

「無いね」

「酷いです〜！ 酷すぎます〜！ リルは大人の女です〜！」

彼女はしばらく駄々をこねていたがレイヴァンが相手にしないで放置していると、いつの間にか眠りについていた。

彼女が寝付いたのを見届けるとレイヴァンは再び天井を静かに見上げ、物思いに耽りながら眠りに着いた。

その夜、夢を見た。

夢の中の自分は白を基調とした服を身にまとい、立派な剣を腰に差していた。

ものすごい勢いで階段を駆け上がり、どこかの大広間に辿り着くと何人もの兵士が倒れている。

慌てて駆け寄って声を掛けるが、誰もが既に息を引き取っていた。

彼らを抱きかかえると両手にべっとりとした感覚がまわり付く。

周囲を見渡し叫ぶと、大きな黒い羽根の翼を羽ばたかせながら悪魔が現れた。

すかさず剣を抜き間合いを一気に詰めて斬撃を繰り出したが、相手は不適な笑みを浮かべながら宙を舞い軽々とかわした。

不意に真紅の眼が見開いたかと思うと、今度は悪魔が先手を取り

黒い剣をかざして襲い掛かってきた。

お互いの剣は何度も激しくぶつかり合う。

互角の勝負かと思われたが、突然自分の剣は大きく弾かれ、回転しながら床へと突き刺さった。

怯むことなく呪文を詠唱すると自分の手には光る剣が生み出された。

悪魔はその光景を見て大いに笑う。

納得したように頷くと、一層激しく攻め立ててきた。

何度かその攻撃を防いでいたが、突然身体の動きが鈍くなった。

舌打ちをする間も無いまま、黒い剣が自分の身体を貫いていた……

そこで夢が終わり、レイヴァンは自分の叫び声で目を覚ました。

「断片的とは言え久々に嫌な夢を見たな……」

呼吸を荒らげながら身体を起すと、小声で呟きながら夢の内容を思い出すかのように自分の右手を見つめる。

指貫の黒い皮手袋を外した右手。

手の甲には大きな傷跡があり、その傷跡の周りにはまるで眼のような異様な形をした痣があった。

その傷跡をしばらく見つめた後、今度は隣で寝ているリルを見た。

彼女は、すやすやと寝息を立てて眠っている。

一瞬笑みを浮かべるとベッドから降りて窓際へと足を運び、窓の外を眺めた。

視界の手前には深夜の薄暗い町並みが、奥には空に浮かぶ月が見える。

悪魔がこの世に現れるようになってから月は紅く染まっていた。

人々はこの紅い月を災いの象徴として忌み嫌っている。

レイヴァンだって例外ではない。

「嫌な月だ」

レイヴァンが月を睨んでいると、突然闇の中で甲高い悲鳴が響いた。

次の瞬間には視界に何かが飛び込んでくる。

かなり遠くだが、地面から夜空へと羽ばたく物体。

すぐにマスターの言葉を思い出した。

「あの翼、悪魔に間違いないな」

上着のロングコートを素早く羽織ると、ベッドの側に立てかけて

いた剣を手に取り、窓から外に飛び出した。

軽やかに着地すると駆けながら剣を腰に携える。

彼は夜空を見上げながら飛んで行く悪魔を追いかけた。

町の中心を外れ、暗い夜道を月明かりを頼りに走り続けた。

かなりの速度で悪魔を追いかけているのだが、如何せん相手の飛行速度には及ばない。

次第に距離が離れていく。

これまでかと追跡を諦めようとした時、運良く魔物が町外れの丘の上に立つ大きな屋敷へと入っていくのが見えた。

「あそこが奴の住処か」

このまま一気に屋敷へ乗り込もうかと考えたが、悪魔に対し情報が少ないまま飛び込むのは余りにも無謀なことだ。

ここは深追いしないことにすると、情報を集めるために先程悪魔が飛び立ったと思われる場所に向かうことにした。

しばらく走ってレイヴァンは悲鳴が発せられたと思しき場所に辿り着いた。

道端には篝火が燦っている。

レイヴァンはその中から一本を取り出して松明とすると、かざして夜の道を照らし辺りに目を配る。

深夜の道は誰一人歩いていない。

あれほど大きな悲鳴が聞こえたのに町人が誰一人野次馬として外に出てきていないことを考えると、やはり悪魔を恐れていたことだろうか。

怪しげなモノは何も見つからなかったが、少し進んだ先にあった袋小路の地面に大きな黒い染みがあることに気がついた。

しゃがみ込み指で触れると、血であることがすぐに解った。

注意深く辺りを見渡すと小路の一番奥に人が倒れている。



地には擦った痕があり、伏したまま移動しようとしたようだ。

倒れる若い男性は腕を伸ばして光るものを掴んでいた。

死後硬直が始まっている彼の指を開き、握り締めた物を手に取り、それは大きな花をモチーフにした銀細工の髪飾りだった。

この男の持ち物ではないだろうな。

更に詳しく調べようとするが、周りに何かが居ることを感じ取ったレイヴァンは静かに立ち上がった。

レイヴァンが視線を送る闇の奥で輝く眼。

毛に覆われた何かが鋭い牙を剥き出しにしてこちらを睨んでいる。

「魔犬が三匹か」

悪魔が現れるようになってから、その狂気にあおられて一部の家畜たちは凶暴になり人間を襲うようになっていた。

こいつらが襲ったのか？

瞬時に相手を見極めると剣を抜いて構えようとしたが、それよりも早く相手が先手を取り一斉に襲いかかって来た。

抜剣できなかったことに対して心の中で舌打ちしたものの、体は既に次の手に向けて動いている。

彼が動じることは一切なかった。

一匹目の突進を紙一重でかわし、続けて飛びかかってきた二匹目の魔犬の口に手に持っていた松明を突っ込んだ。

魔犬は叫ぶこともままならず、地面をのた打ち回る。

その様子を見た他の二匹が怯んで一瞬動きを止めると、彼はその瞬間を見逃さなかった。

すかさず剣を抜いて反撃に移った。

魔犬との間合いを一気に詰めると剣を薙ぎ払う。

対して魔犬は器用に体をひねり横へ跳躍して斬撃をかわす。

一瞬で均衡状態となり警戒を強めた相手は、むやみに飛びかかって来なくなり睨み合いが続いた。

しばらくの沈黙の後、魔犬がゆっくりと距離を取り始めた。

突然の出来事に訝しんでいると、闇の中から声が聞こえてくる。

同時にタキシードを着た白髪の老人が音を立てずに現れた。

「これはこれは、私の犬がご迷惑をおかけしたようで」

彼は腕を静かに胸の前にもってくと深くお辞儀をする。

一件紳士的に見える行為だが、その老人の放つ不気味な魔力を感じ取りレイヴァンはすかさず剣を構えた。

「おやおや、穏やかではありませんね」

「悪魔がよく言ったものだな」

レイヴァンの一言に相手の眉がピクリと動く。

「これはこれは、良くご存知で」

「お前がこの町で悪さをしている悪魔か」

今度は口元が、にやりと動く。

「おやおや、そんなことまでご存知なんですか？ でも、いけませんね、無用な詮索は命を落しかねません！」

老人は言い終えないうちに物凄い勢いでこちらに向かって突っ込んできた。

悪魔だと解つていても老人が素早く動く姿には違和感を覚える。

「穏やかでないのは、どちらなんだか」

再び先手を取られることになったレイヴァンだったが、慌てず前に出て迎え撃った。

「シャアッ！」

奇妙な声と同時に老人の鋭く伸びた爪が胸元を目掛けて繰り出されると、レイヴァンは振りかざしていた剣をすかさず身体に引き寄せて刃で受け止める。

甲高い音が闇夜に響いた。

「これはこれは、やりますね」

老人は不敵な笑みを浮かべると続けて攻撃を繰り出そうとするが、今度はレイヴァンがわずかに早く攻撃を仕掛けた。

爪を払い退けると、剣を真横に薙ぎ払う。

鋭い一閃だったが、相手を捕えることはできなかった。

老人は後ろに跳躍して攻撃をかわすと、そのまま空中で静止したのだ。

一瞬呆気にとられるが、すぐに闇にまぎれて羽ばたく老人の翼に気が付いた。

「小賢しい真似を」

「おやおや、お気に召しませんでしたか？」

老人は不敵な笑みを浮かべ続けながら、空中を左右に移動する。

「本当に気に食わない存在だ」

「これはこれは、悪魔にとって最高の褒め言葉を頂き光栄ですね」

老人は腕を静かに胸の前にもってくると、再び深くお辞儀をした。

「そのふざけた口調と態度を取れるのは今のうちだけだ」

レイヴァンの剣を握る手に力が入る。

「面白いことをおっしゃる人間ですね。ですが今まで私を倒そう

とした皆さんも、そうおっしゃいましたよ？　そして、無様に死んでいった」

「俺を今までの人間と同じだと考えないことだ」

「そうですか、それは楽しみです」

空中でほくそ笑んだ老人はおもむろに言葉を続ける。

「……しかし、空を自由に飛ぶことができない人間というのは、いつ見ても実に不便な生き物ですね」

「それがどうかしたか？」

「大問題だと思いませんか？　それで、どうやって自由に空を飛び回るこの私を攻撃しようというのです？　いつそのこと、その剣を私に向かって投げ付けてみますか？」

「それは良い考えだ」

レイヴァンは不敵な笑みを浮かべると剣を構えながら相手を見据えた。



それから少しの間睨み合いが続いたが、レイヴァンは突然剣を握りしめたまま老人に背を向けて走り出した。

「おやおや、あれだけ強気な発言をしたのに……背を見せて逃げ出すとは、貴方は今まで殺してきた人間で一番臆病な人間のようにです」

老人はレイヴァンを嘲笑するが、彼は反論することなく走り続けた。

「そのような遅い速度で、私から逃げ切ることができると思っていますのですか？」

老人は逃げるレイヴァンを物凄い勢いで追いかけ、わずか数秒で背後を捕えた。

「一撃で殺して差し上げましょう！」

老人の鋭い爪がレイヴァンの左胸を背後から捕らえようとする。

その刹那、レイヴァンは踏み出した足をしっかりと堪え立ち止ま

ると、振り返りながら剣を思いつきり薙ぎ払った。

闇の中に不気味な悲鳴が響いた。

老人の左腕は切断され宙を舞い、ぼとりと地面に落ちる。

その腕は血が流れる間もなく石へと変わった。

老人は空中で振るえ、怒りを全身で表している。

「に、人間如きが！」

老人が叫ぶと、その姿は爪と牙が闇夜に鋭く光る悪魔へと変化した。

爪と牙以外にも嘴が尖っており一見すると鳥の化け物に見える。

「その姿、ガーゴイルか」

「生きては帰さんぞ！」

ガーゴイルは再び叫ぶと大きく翼を広げレイヴァンに向かって飛びかってくる。

「そうやって、そっちから来てくれるなら空に居ても問題ないな」

ガーゴイルは残った右手を振りかざし、鋭い爪で襲いかかる。

それに対しレイヴァンは剣をかざして真っ向から迎え討った。

爪と刃が何度もぶつかり合うこと十数回。

レイヴァンは痺れを切らし大振りになった相手の攻撃を剣で弾くと、無防備となった胴に斬撃を繰り返した。

ガーゴイルは攻撃をかわすことができずに脇腹に一撃を受け、小さな呻き声を上げる。

慌てて空中に浮かび上がり体勢を整えた。

レイヴァンの攻撃にガーゴイルの怒りは更に膨れ上がった。

文字では表現できないような言葉を叫ぶと、脇腹から血を流しながら再度向かってくる。

ワンパターンの攻撃には思わずため息が出そうだ。

先ほどと同じように相手の攻撃を受け流すと今度は立て続けに斬りつけた。

「覚えている、人間！」

ガーゴイルはこれ以上戦っても勝てないと悟ったのか翼を羽ばたかせて間合いを取り始めた。

言い放った言葉は負け惜しみにしか聞こえない。

「逃がすものか！」

逃走しようとした相手の様子に気が付くと、レイヴァンはすかさず剣を左右に続け様に切り上げた。

その剣先からは二つの光の刃が放たれる。

放たれた光の刃はガーゴイルの両翼を同時に捕えて斬り落とした。

一瞬の出来事に、ガーゴイルは何が起こったのか解らない。

地面へと向かって落ち始めると、ようやく翼を失ったことに気が

付いたようだ。

落ちる間際になんとか我に返り、地面に叩きつけられることだけは免れた。

「き、きさま、その攻撃は!？」

「精霊術の応用だ、さすがに剣は投げられないからな」

ガーゴイルが着地して言葉を発している間にレイヴァンは間合いを詰めていた。

すでに刃が届く間合いとなっている。

「人間を甘く見すぎたな」

「ま、まて!」

ガーゴイルは慌てて、相手に向かって右手を上げる。

「悪魔に情けをかけるつもりはない」

彼が剣を力いっぱい薙ぎ払うと闇夜に不気味な悲鳴が響いた。

「き、き、さま……」

剣を鞘に納め歩き出したところで、背後からかすれた声が聞こえてきた。

「体が半分に分かれても人語を話すとは、しぶといな」

レイヴァンは振り返ってガーゴイルを見る。

切り離された下半身は完全に石に変わっていたが、顔の部分だけが未だ石に変わっていなかった。

再び剣に手をかけるも相手の顔が徐々に石へと変わる様を見て、直ぐに再び背を向けて歩き出した。

「あいにく精霊石を持ち合わせていないからな。そのまま石にでもなってくれ」

「ル、ルーマ様が、必ずや！」

ガーゴイルは力を振り絞り、そう言い残して事切れた。

最期の言葉にレイヴァンは小さく舌打ちすると、厳しい顔つきで酒場へと戻った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6116y/>

---

魔天創記 （壺）

2011年12月25日23時00分発行